

コロナ禍の中で、 人々に寄り添った 活動を継続しています。



世界中で新型コロナ感染が再拡大し、分断と格差がますます広がっている中で、難民キャンプや占領下に暮らすパレスチナ人たちはどうしているのでしょうか。

今号のサラームでは、現場で活動している「子どもの家」のソーシャルワーカー、幼稚園の先生、補習クラスの先生などからレバノンの難民キャンプの状況を聞きました。またガザからは、アトファルナろう学校、理学療法士、ナワール児童館から話を聞きました。

経済危機、コロナなど多くの困難の中での生活と、人々を支えている現場スタッフたちの苦闘を知っていただければと思います。スタッフたちは停電やインフラの制限があっても、私たちと同じように新しい技術を苦勞しながら使い、同時にそこから取り残された人たちに寄り添った活動をしています。

今回、当会の実施する様々な活動を担うスタッフの報告

から、皆様のご支援がどのように生かされているか知っていただければと思います。また、当会の日本人駐在員たちは現在もエルサレムに2人、ベイルートに2人とどまってこうした現場の活動を支え、日本に紹介する活動を続けています。

重苦しい空気の中で日本社会でも閉塞感が強まっていますが、その何倍も厳しい政治的社会的な状況と暮らしの中で、世界から忘れられているパレスチナやレバノンの人たちがコミュニティの人々を思いやり、懸命に生き抜いている姿は、私たちに希望を与えてくれるように思います。ガザの子どもたちがベイルートの爆発事故の被災者に連帯の気持ちを表す活動を行ったことにも心を動かされます。こうした人々とつながり、私たちにもできることはたくさんあるのです。

レバノン 経済危機・コロナ・ 爆発事故の三重苦の中で

【レバノン南部から】

レバノン南部にあるブルジシェマリ難民キャンプで、ソーシャルワーカーとして、家族にサポートを提供しているアマルさんの報告です。今年は特に家族向けの心理的サポートを担当しています。



アマルさん

日々の糧を求めて

ブルジシェマリも他の難民キャンプと同じように生活が大変になってきています。住民の多くは農業の日雇い労働者で、1日働いても賃金は250円にしかありません。しかも季節労働で、コロナ状態になってからは90%が職を失いました。妻たちが清掃などの仕事を始めていますが、これも声がかかる時だけで1日300円にしかありません。レバノン通貨の価値が下落して賃金が5分の1になった一方で、物価が上がりミルクも肉も値段が10倍になり、給料があっても買えなくなりま

した。

日々の食料確保ができなくなっています。ごみの山で使えるものを探している子どもたち、街に出て物乞いをしている子どもたちもいます。今朝もセンターに二人の母親がやってきて助けを求めました。一人は子どもが5人いるのに手持金が全くなかったと言いました。わずかですがお金を渡しました。もう一人は夫が病氣なのに薬が手に入らないと訴えました。薬局で「ありません」と言われたのです。知っている薬局と交渉して入手できるようにしました。国連 UNRWA の診療所では痛み止め以外の薬はも



シェマリキャンプ入り口でマスクを配る青少年

らえないからです。こうした人は、「特に支援を必要とする家族」のリストに加えて、外部から支援が来た場合に対象にします。「子どもの家」だけでなく、他の団体とも共有して何かしらの支援が行くようにしています。国連も最貧困世帯に1月あたり4万レバノンポンドを配布していますが、1年前までは25米ドル相当の価値があったのに今では5米ドルにもなりません。

新型コロナの感染はキャンプでも拡大しているので、あらゆる機会を使って情報を提供しています。ワークショップや家庭訪問でも最初に必ずコロナ予防の話をしします。しかし一般の

キャンプ住民はコロナに注意深くありません。マスクをしていない人も多く、交流も盛んなため陽性が増えています。「2時間しか使わないマスクを買うよりも、食べ物を買いたい」と言うからです。

オンライン授業の悲劇

学校が休校しオンライン授業になったことは、子どもにも家族にも大きなストレスです。悲劇といってよいかも知れません。資金不足のためUNRWAの学校は1クラスの人数が増え、質が下がっていました。そこへコロナです。これまで成績の良かった子どもたちでも、オンライン授業はよく分からないと言っています。家に1台しか携帯電話がなくて、子どもが4人いたら、どう使えるというのでしょうか。レバノンは計画停電が続いていますが、自家発電がある家はほとんどありません。ソーシャルワーカーとして私が担当している家庭は84世帯ですが、そのうち30世帯は携帯電話がなく、19世帯は携帯があってもインターネットがなく、25世帯は親の教育水準が低くて子どもの勉強を見ることができません。どんな理由であってもオンライン授業を欠席すると出席日数が減らされ、進級できなくなるという話を教員から聞かされて、多くの保護者がますます不安になっています。

母親たちと少女たちのストレスケア

いま、お母さんたちに対して、ストレスを減らすためのワークショップを開いています。1グループ5人から7人と少人数にわけて、呼吸法や瞑想を教えています。腹式呼吸で深い呼吸をゆっくり繰り返します。また、自然の景色や鳥の声などを思い出して気持ちを落ち着かせます。その前後でストレスレベルをチェックすると、大変良くなっていることが分かります。参加者にも大好評で、次回はいつですか？と皆さん聞いてきます。ストレスケアだけで問題は解決しませんが、精神科医にかかるような心理的危機状況まで追いつめられないようにすること

はできると思います。

同じようなワークショップを10代の少女たちにも実施しています。中高生はオンライン授業でストレスを抱え、両親の不和や離婚などの問題を抱えています。ストレスの緩和に加えて、少女たちを「子どもたちのリーダー」として育てることも目的です。他の人を支える役割を担ってもらうことはとても大事なのです。

離婚が増えています。最近も何人かから相談を受けました。多くの家庭で母親に大きな負担がかかっています。家庭内暴力も増えていますし、性的虐待のケースにも最近出会いました。15歳の少女が父親から虐待を受けていました。しかも妹や弟の前で。母親が相談に来たので、少女には産婦人科を受診させ、子どもたち全員を精神科医



親子への心理サポート



子どもの絵



に見てもらっています。

経済危機とコロナは、脆弱層の人たちだけでなく、私たちソーシャルワーカーや「子どもの家」のスタッフにとっても大きな困難です。私は27年間活動していますが、こうした状況で他の人を支えるためには、自分自身も強くならなければなりません。そして、どれだけ大変でも困っている人たちに支援を続けていきたいと思っています。困っている家族を見捨てることはできないからです。国際的な支援がどんどん減っている中で、キャンプ住民はただ嘆いているだけでなく、お金を少しずつ出し合う相互扶助システム（日本の無尽講のようなシステム）を作って助け合っていることも、皆さんに知っていただければと思います。

食料配布と栄養支援

大変に厳しい経済状態の中で、十分に食事をとっていない家族が増えています。パレスチナ子どものキャンペーンでは、こうした家族に対する支援も続けています。

レバノンでは食料配布を実施中です。春以降、山間部では1,500世帯に3回、バイルートや北部などでも1,000世帯以上に2回配布をしました。皆様からの食糧支援募金のおかげです。心からお礼を申し上げます。今後も食料配布を継続する予定です。

ガザでは妊産婦と乳幼児への栄養支援を続けています。コロナの影響で診

療所での診療は思うようにできないこともあります。乳幼児への栄養剤やビスケット、妊産婦への鉄剤の支援を行っています。また電話による医療相談も行っています。



【幼稚園児と一緒に】

ベイルートにあるシャティーラ難民キャンプの幼稚園で、先生をしているサナさんの報告です。



サナさん

ベイルートの難民キャンプも大変厳しい状況にあります。特に昨年、労働大臣が難民の就労を制限してから、人々は失業したり日雇い仕事しかできなくなっているからです。収入がある人は大変少なくなっていますし、たとえ収入があってもレバノン通貨で支払われるので、実質賃金は5分の1以下になっています。

病院は満杯でレバノン人でもなかなか入院できないのに、パレスチナ人やシリア人が入院できる可能性は大変低いです。だから誰もがコロナの恐怖を抱きながら生活しています。国連の公式発表ではコロナの感染者はレバノンのパレスチナキャンプ全体で1,867人、死者は46人（レバノン全体では感染者約7万人、死者580人）です。パレスチナ難民の感染者はUNRWAの隔離施設に2週間入ることになっています。PCR検査は100ドルかかりますし、キャンプの住民の中ではコロナを気にしていない、それどころかそんなものは信じないという人もいます。日々の食物に困っているからマスクや消毒液を買えない人が多いのも当然です。

経済危機と大爆発事故

パレスチナ人のほとんどは肉など買えませんし、野菜でさえ贅沢品になっています。生のインゲン豆は1キロ1000円以上します。以前は3キロ100円もしなかったリンゴでしたが、今では1キロ300円ほどです。政府が補助

金を出している主食のパンの値段は1袋200円で変わりませんが、1袋が10枚から8枚に減りました。今後国連などの支援もなくなるのではと不安が広がっています。薬局では、例えば血圧を下げる薬が買えませんが、「在庫隠し」どころか、外国に転売しているという話もあります。解熱剤もなくなるのではと心配しています。ただマスクはキャンプ内で製造するところがあったので、買うことはできますし、洗って使えるものも売っています。

8月に起きたベイルートの大爆発事故は子どもたちにも影響を与えました。シャティーラキャンプは事故現場から5キロは離れていますが、爆発の衝撃でベッドから落ちた子どもがいたり、大きな地震が来たとおびえたり、その後も大きな音にショックを受けたり。そして、事故後連日テレビで報道された被害状況を見て、ショッキングな映像が恐怖を増幅させていました。また起きるのではないかと、自分や家族がまきこまれるのではないかと、亡くなった人や壊れた家から想像してしまうのです。子どもたちの反応を見た私たちは彼らに好きなように話をさせました。それから歌ったり、踊ったり、叫んだりと様々な活動をして感情を発散させました。子どもたちが少し落ち着いたなら、お家が港から遠くてよかったね。もう大丈夫だよ。街も元通りになるよう神様にお願いしようねと話しました。子どもたちもだんだん落ち着きを取り戻しました。大人も不安で押しつぶされそうだったし、子どもたちは恐怖や不安を吐き出したかったんです。

インターネットを活用した授業

レバノンでは3月以降、教育省が学校の閉鎖を宣言し、「子どもの家」でもその指示に従っています。狭く人口過密なキャンプに空き地などなく、外で遊ぶことはできず、子どもたちは退



シャティーラ幼稚園では、個別対応もする

屈しています。最初のころは「ユーチューブ（動画共有サービス）」などでコロナ予防の情報や教育的な映像を探して紹介したりしていました。またプリントを作り、子どもたちが家でそれを使って遊んだり、学べるようにしました。家庭で使えるように子どもたちに文具を配って本当に良かったです。その後、ビデオの作り方やオンラインでの発信の仕方、シナリオの作り方などの研修を受けました。研修では自分でプレゼンして、他の参加者からの指摘や評価も受けました。クラスで教えているように説明をしても、一方的にならないように十分な時間を取って子どもたちからの質問も受けます。ユーチューブのほか、「ワッツアップ（Lineに似たシステム）」のグループが大活躍です。

受け持ちの子どもたちとは毎日コミュニケーションをとります。昨年度（レバノンでは教育機関は秋に始まり翌年夏に終わる）の年長クラスには24人の子どもがいました。そのうち5人はビデオが使えませんでした。一家に1台しかスマホがなくて子どもが3人いるのは当たり前。スマホが家になくてもいい子どももいます。そういう子どもたちは一人ずつ母親とセンターに来てもらって、ビデオの代わりに実際に教え、宿題のやり方を教えたり回収したりします。もちろん教育熱心な家庭があれば、親が文字を読めないような家庭もあります。24人のうち10人の子



コロナ下でも虐殺事件の追悼行事が行われた



どもは宿題をすぐ出しますが、残りの子どもたちは催促しないと出さないし、ずっと出せない子どももいるのです。幼稚園で日常的に教えているのと違ってそこが難しいですね。

新学期を迎えて

教育省が11月から学校を再開すると宣言しました。幼稚園では1クラスを4つに分け、週に3日ずつ登園する体制を準備しています。今年の年長クラスは28人が登録しているので、1グループ7人ずつです。小学生の兄姉が教科書をもっているのを見て、幼稚園児も、私たちも幼稚園に行けると期待を寄せています。

コロナ感染が始まって私たちはとても怖い思いをしています。しかしこの半年いろいろな経験をして、今では準備ができているという気がします。

補習クラスから

バダウィ難民キャンプで、補習クラスの先生をしているラニアさんにも話を聞きました。

ロックダウン中、担当している19人のシリア人の子どもに、毎日各レベルに合わせた3種類のプリントを配り、保護者に電話でフォローしていました。読み書きできない人が多くて保護者経由だと話が通じないため、プリントのやり方などを子どもたちに直接説明するビデオを作りました。毎日プリントとビデオを保護者のSNSグループに流して、子どもたちがプリントを終わらせたなら送り返してもらいます。保護者からの連絡にはいつでも対応しました。ラマダンの時期には夜中に電話してくる人もいましたし、日曜日に電話が来たこともありましたが、すべて対応しました。シリア人は家族をシリアに残していたり、海外に移住しているため家賃を払わなくてもインターネット代を払うことから、連絡は意外に問



題ありません。

いま北部では感染が収まっているため、4グループに分けた子どもたちに週2日ずつ普通の授業をし、週1回イベントを行っています。ロックダウン中に大変な苦勞をして割り算を教えたのですが、みんなすっかり忘れていて、最初からやり直しています。実際の授業が「薬」だとしたら、リモート授業は「サプリメント」みたいなものです。子どもたちは補習クラスが始まって本当に喜んでます。他に行くところもないし友達もいるから、補習クラスに熱心に来ています。みんな学校に戻りたがっているのです。

私は29年間幼稚園で教えてきました。今までと違うのは、子どもだけでなくお母さんたちへの教育が大事ということを実感していることです。いままでもお母さんたちを集めていろいろと教えてきましたが、この半年ほどお

母さんたちと深い信頼関係が築かれたことはありませんでした。若いお母さんが多いのでみなオープンですし、私を本当に頼りにしてくれます。

※なおレバノンでは、爆発事故で被災した障がい者支援も予定しています。

ガザ

ガザの現実の中で

【聴覚障がい者のハースムさんに聞く】

ガザのアトファルナろう学校で、木工の職業訓練を担当しているハースムさんは、自身もろう者です。手話でお話いただきました。ハースムさんは95年来日したことがあります。



ハースムさん

日本の皆さんこんにちは。日本のろう者の皆さんはお元気ですか。ガザに住む私たちの生活はどんどん悪くなっています。みんな失業しています。停電が続いています。そしてコロナです。みんなは不満が高まり、怒っていてデモも起きています。だれも希望を持ってないのです。コロナでロックダウン中は家にいるほかないのです。家には発電機がないから、テレビも扇風機もつきません。夜停電になると小さ

なランプをつけます。それもないときは真っ暗ですから、手話も見えなくなってしまいます。そうなったらもう眠るだけです。停電は每晚8時からの予定ですが、早い日は5時から停電になります。

3月初めには「コロナは遠い場所のことだ」と心配していませんでした。それがイスラエルやヨルダン川西岸で広がってからは、みんなとても怖がっています。最初のロックダウンの時に



工房での作業

は1週間牢屋にいるようでした。家の中に食料品がほとんどなくなり、買い物に出たらあちこちに警官がいて、私は手話で説明したのですがもちろん通じず、怒鳴られただけでした。扉が少し開いている小さな店をどうにか見つけて、食べ物を買うことができてホッとしました。

ろう者の情報ネットワーク

私のうちでは、妻と子どもの半数



が聞こえるので、妻がテレビをみて情報を教えてくれます。でもガザの多くのろう者には、コロナの情報はちゃんと伝わっていません。そこでWhatsAppのグループで、ろう者の仲間にメッセージを伝えています。ガザのろう者は文字を読むのが得意ではないため、手話のビデオが必要です。私のWhatsAppのグループには200人がいて、その人たちが次に自分の知り合いに広めます。またFacebookなども連絡手段として使っています。でもスマホやインターネットを持っていない人もいるし、停電が続くと通信は途絶えます。アトファルナろう学校では、緊急委員会を作っていて、私もそのメンバーですが、そこで情報を集めて、私たちがそれをガザのろう者に知らせているのです。

職業訓練で製品を作っていますが、コロナのせいで買う人がいません。それでもアトファルナで働いている人たちはまだ収入がありますが、他の人たちには収入がありません。この前も若いうの男性に道で会いました。4人子どもがいるけれど収入が全くないと言ったのでアトファルナを紹介して、食糧をもらえるようにしました。私の息子2人も20代ですが失業しています。これまでも私たちの生活は大変でしたが、こんなに厳しかったのは初めてだと思います。

いま、アトファルナろう学校は休校しています。近々ガザでは高校が再開し、その後中学が再開することになっています。その後が小学校です。アトファルナも小学校と同じ時期に再開します。コロナで学校が閉鎖されたとき、アトファルナではまず、先生たちにオンライン授業の研修を

行いました。SNSなどでどのように授業を行うかということです。そして、FacebookやWhatsAppを使った授業を行っています。もちろんインターネットなどを持っていない家庭もあるので、聞こえる保護者がいる家庭に

は電話をかけて指導したり、それも難しい場合は家庭訪問をしています。

日本の皆さんがずっと私たちのことを支援してくれていることに心から感謝しています。皆さんは私たちの家族です。

【身体障がい者の実情と支援】

ガザでは、リハビリや補助装具など身体障がい者への支援を継続しています。現地専門家としてこの活動をサポートしているヤセルさんに話を聞きました。



ヤセルさん
(理学療法士)



オンラインでの家族支援

ご存知のようにガザでは、軍事封鎖、電気や水の不足、コロナ、失業、政治的な分断と和平プロセスの頓挫など、複合的な厳しさの中で私たちは生活しています。医療保健システムは特に危機的で、医薬品の不足と国際的な支援の不足が一層ひどくなっています。そこにコロナの感染拡大が覆ったのです。米国どころかEUの支援も以前よりも少なくなりました。

障がい者とその家族の状況はより過酷です。ガザでは人口の約2.6%にあたる48,000人が障がい者、その約半数が身体障がい者です。3割が農村部に住んでいるため支援が届いていません。9割が失業しています。半分以上の障がい者家庭が1日5.5米ドルの貧困ライン以下で生活をし、インターネット環境や携帯電話を持っていないと考えられています。また、障がい者は差別され、どのくらいの障がい者にコロナの情報が伝わっているか、何人がコロナにかかっているかなど実情は分かりません。

当事者目線の支援

ロックダウン中は、感染防止のため

家庭訪問リハビリを中断していますが、その代わりにオンラインで家族にリハビリを指導して、家庭でもリハビリを継続できるようにしています。「ズーム（ビデオ会議システム）」や電話などを使って理学療法士が家族に連絡を取り、可能な場合は、実際にリハビリをしているところを見せてもらって、具体的な指示を出します。家族は不安を抱えているので大変好評です。もちろんインターネットがない家庭がありますので、隣近所でインターネットのある家に集まり、感染予防に注意しながら、合同でリハビリ指導を受けられるようにすることを考えています。家庭訪問が難しい期間中、ガザ中部と南部でリハビリ施設の修繕や開所準備を進めています。また理学療法士やソーシャルワーカーの研修を実施しています。

現在ガザには2,000人ほどの理学療法士がいますが、実際に仕事がある人は2割もいません。またその多くは、学校を卒業後に学ぶ機会がほとんどありません。ガザの理学療法士のレベルは決して低くないと思いますが、新しい考えや技術を知るチャンスがないのも問題です。パレスチナ子



理学療法士研修

ものキャンペーンが理学療法士たちに研修機会を作っているのはとてもありがたいです。特に「国際生活機能分類 (ICF)」という考え方を導入しているのはとても勉強になっています。障がいの程度や筋力だけで見るとはならず、その人の生活や希望などを360度にわたって見て、障がいと生活機能を当事者目線で考えることのできる本質的な支援です。

他からの支援が無い

ガザでは公立病院もリハビリ支援をしています。15か所に毎日数千人が殺到するので十分な対応ができません。UNRWAのクリニックでも同じような状況です。しかもガザで

ガザのコロナ対応

ガザでは10月26日現在、5,594人が感染し、31人が死亡（パレスチナ全体では感染者6万2,588人、死者525人）しました。症状が出た人は、保健省のテレフォンサービスに電話しPCR検査を受けることができます。陽性になった場合、南部にある隔離施設で2週間過ごしますが、衛生状態が悪いのでそこに滞在するのを嫌う人が多く、家で自主隔離をしている人が3割程度いると言われます。

身体障がい者支援をしている海外のNGOは、「パレスチナ子どものキャンペーン」のほかには、「国境なき医師団」と「ヒューマニティアンドインクルージョン」しかありませんが、後者二つは紛争による被害者にしか支援をしていません。別の言い方をすると、パレスチナ子どものキャンペーンだけが、18歳以下の子どもたちや生まれ

つきの障がい者、また事故などによる障がい者への支援など区別なく支援をしているということです。そこをとっても評価しています。また、支援の少ないガザ中部と南部を中心にした活動をしていることもとても大事なことです。今後も一緒にガザの障がい者の支援ができることを願っています。

【ナワール児童館から】

ガザ南部のハンユニス郊外に「ナワール児童館」があります。その館長のナジュワさんにも話を聞きました。当会が開設から支援したナワール児童館は15年目になります。



ナジュワさん

ハンユニスもガザの他の場所と状況は同じです。封鎖、包囲、経済危機、そしてコロナ。人口が密集し、大多数の住民が、乗り合いタクシーの運転手や屋台販売など日雇いの仕事をしていたため、ロックダウンで収入がなくなりました。物価は上昇しその影響は特定の人だけにとどまりません。近隣でコロナの感染者は発生していませんが、感染防止のため、9月から児童館は閉鎖しています。

コロナ感染が始まった3月以降、児童館では子どもたちとの連絡体制をとるための準備を進めてきました。そして、Facebookやズーム、ワッツアップなどを使って情報を広めることを進め、ナワールのワッツアップ・グループには250人以上の母親が参加しています。

家庭内でのストレスが心配なので、保護者向けの活動を強化しています。他の児童館や「女性保健センター」（当会と乳がん対策事業などを実施中）と連携して、コロナについて知識や情報を伝えるためのビデオを作り感染防止のやり方も広めています。脆弱な世帯には衛生用品を提供しました。

ストーリーテリング

休校やロックダウン中に、家で過ごす子どもたちにできる遊びや活動、コミュニケーションの取り方等をビデオなどで伝えています。また、心理専門家や児童館の指導員に携帯電話を貸与して、ホットラインのようにいつでも保護者からの相談に乗れるようにしています。指導員は子どもからの相談にも対応しています。

補習クラスでもワッツアップ・グループを作って、国語や算数など科目ごとに、プリントを配布しビデオで課題の解説をしています。ロックダウンの前は、感染防止策をとって少人数を児童館に呼んで授業もしていました。また、ノートやペンを買うことも難しい家庭が多いので文房具も配布しています。

毎年夏休みにはリクリエーションイベントを開催してきました。いつもは200～300人の子どもが合同して活動をしますが、今年は60人ずつ4グループに分け、1グループもまた少人数に分けて別々の活動をしました。図工、音楽、演劇、電気を使わないゲーム、「ストーリーテリング」などです。



ラマダンで使う言葉の学習

また母親たちの料理コンテストもあります。少人数の活動によって活動の質が高まることが分かったので、コロナが収束してもこうした形で活動を続けようと思っています。

「ストーリーテリング」は「ハカワティ」とアラビア語で言います。主人公になりきったり感情をこめたりして、聞く人と一体感が生まれるように朗読します。大人による「読み聞かせ」ではなく、子どもたちが朗読をします。子どもたちがとても好きな活動です。どんな内容でもよく、好きな本を読むので構いません。親子で一緒に本を選んだり、一緒に読んだりします。親子ワークショップでやり方を教えますが、指導員はアドバイスをするだけで、100%親子による活動です。本は児童館で貸し出ししています。

子どもたちがビデオを投稿

多くの子どもたちがワッツアップ・グループやFacebookに自分で作ったビ

デオを投稿しています。「児童館に行けなくてつまらない」、「児童館と指導員の先生が大好き」、「友達に会えずさびしい」といったメッセージが多いですが、他の子どもたちに対して「こんな遊びを考えたいよ」、「つまらないときにはこうしたらいいよ」、「弟や妹にこんな風に本を読んであげたらいいよ」といったアドバイスもあります。毎日10本は投稿されています。

母親向けのズームを使ったワークショップもあります。いまニーズが高いのは、最近増えている離婚をテーマにしたものです。特に離婚にあたって、女性が不利にならないように法的な権利などを教えています。

レバノンに連帯して

もちろんガザではインターネットを持っていない家庭も多いし、何よりも停電が問題です。オンラインでの活動をする場合には、地域ごとに異なる停電時間を考えて調整することも必要です。最近感染状態が落ち着いてきたので、児童館での活動を始める計画を立てています。先日スタッフが集まって準備会議をしていたら、近隣の女性たちが10人以上現れました。「児童館が開いたと思ったのよ」とい



ナワール児童館の子どもたち

うことでした。利用者向けに感染予防のガイドライン冊子を作り、入り口で検温や消毒、マスクの使用を徹底していきます。

コロナに直面して、これまで以上にプレッシャーを感じました。しかし、正しい知識を持ち、予防策をとることで可能なことも分かりました。一方でこの半年、子どもたちは多くの時間家で過ごしました。家庭では、厳しい経済状況で両親が争うことも多く、それが子どもに大きな影響を及ぼしています。児童館では心理専門家を中心に、家族関係の修復と子どもへの悪影響を避けるための支援をしています。喧嘩

するのは仕方がないが少なくとも子どもの前でしないでね、と。また一日も早く子どもたちが児童館に戻って、エネルギーを発散できるようにと願っています。

8月にベイルートの港で大爆発事故が起きたときに、ナワール児童館では子どもたちがレバノンへの連帯、友好、祈り、支援の気持ちをレバノンの旗やハートで表し、被害や苦しみをレバノンの人たちが乗り越えることを信じているとFacebookなどで伝えました(表紙の写真)。レバノンとガザは近いのに行き来はできませんが、市民の心は一つと思っています。

パレスチナ子どものキャンペーンご案内

パレスチナ子どものキャンペーンは

1986年に活動を開始した市民のNGOです。国籍や宗教、民族にとらわれず、パレスチナと中東地域の平和を願い、そこに生きる子どもたちが希望を持って成長できるように、教育・保健・福祉分野での支援と人権擁護を進めています。また、コミュニティの強化と自立的発展に協力しています。

会員になってキャンペーンの活動を支援してください

- 会費(年会費):4,000円、6,000円、10,000円(※ご都合にあわせて、金額をお決めいただきます)
- 会報「サラーム」や随時のお知らせなどをお送りします。詳しくはお問い合わせ下さい。

ご寄付をお願いします

ご寄付・募金を常時受付しております。下記の口座にお振込みください。
郵便振替口座 [00160-7-177367] / みずほ銀行 高田馬場支店 [普通8030448]
三井住友銀行 目白支店 [普通6852351] / 三菱UFJ銀行 目白支店 [普通0152056]
銀行からの送金の場合は、領収書をお出しするために、ご住所とお名前をメールやファックスなどでお知らせ下さい。会費のお振込みも上記の口座をご利用下さい。
クレジットカードでもご寄付いただけます。詳しくはホームページ <https://ccp-ngo.jp/> をご覧下さい。

税金の控除について

パレスチナ子どものキャンペーンは寄付金の税金控除を受けられる認定NPO法人です。税金控除には、当会発行の領収書をつけて確定申告をして下さい。

特定非営利活動法人 **パレスチナ子どものキャンペーン**(認定NPO法人)

〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-23 豊ビル4階 / Tel 03-3953-1393 / Fax 03-3953-1394

Eメール info@ccp-ngo.jp / ホームページ <https://ccp-ngo.jp/>

Facebook [パレスチナ子どものキャンペーンnew](#) / Twitter [@ccp-ngo](#)



パレスチナ子どものキャンペーン